

（海外最新事情）

ドイツ

ドイツの文化とマナーに触れて

法学部 上杉めぐみ

ドイツの消費者団体訴訟制度の調査を行うために、2010年8月22日から10日間、ドイツはベルリン、ドレスデン、ハレ、ミュンヘンを訪れた。今回はその合間に触れることのできたドイツの文化を紹介したい。

日本では、新宿、渋谷、原宿などの繁華街という近代的高層ビルが建ち並んでいるが、ドイツでは、ミュンヘンのマリエン広場などでは500年前に建てられた教会と近代的なデパートが隣接し、中世の趣と近代とが見事に融合しており、街並みを楽しむだけでもドイツの歴史を堪能できる。ただ、今回は博物館・美術館にも足を運んだので、その中から日本でも有名な「ペルガモン博物館」と「レジデンツ」を紹介する。

ペルガモン博物館 (Pergamonmuseum)



（写真）ペルガモンの大祭壇

ペルガモン博物館は、ドイツ・ベルリンの博物館島にある中でも最も新しい博物館である。入口

を抜けると、はじめに博物館の名前の由来にもなっている「ペルガモンの大祭壇」（写真）と対面することができる。とても館内にあるとは思えないサイズの大祭壇である。この博物館の音声ガイドには日本語版・英語版もあるので、音声ガイドを頼りに、大祭壇に直に腰をかけて、ひとりじっくりと古代ローマに思いを馳せることができる。

更に奥に入ると、バビロニアの「イシュタール門」が復元されている。私は門の鮮やかな青色が印象的で、レリーフの復元があまりにも見事であったために、じっくりと鑑賞していたら、いつの間にか同行者とはぐれてしまい、後半は展示品の鑑賞よりも人探しに集中することとなった。館内は広く、観覧者は多かったので、はぐれてから探すのにかなり手間取り、後半部分の展示は、ただただ広いという感想となった。

レジデンツ (Residenz)



（写真）レジデンツのアンティークヴァリウム（考古館）

ミュンヘンにあるレジデンツは、バイエルンを治めたヴッテルスバッハ家が暮らしていた宮殿であり、現在、館内には「レジデンツ博物館」「レジデンツ宝物館」があり、今回はレジデンツ博物館を訪れた。

写真 の考古館には、当時の領主であるアルブレヒト5世が収集した古代の彫刻が並べられており、天井のフレスコ画も圧巻であった。考古館内には、座るスペースもあり、座りながらじっくりと展示品を眺めることができる。

レジデントは広大な土地に建てられており、建物自体もかなり広く、考古館のほかに、121枚の先祖代々の肖像画が飾られている回廊や、2階の居住スペース（ここには、1つ1つの部屋に名前がつけられていて、「客間」「会議室」というもののほかに「法の部屋」というものもある）など鑑賞すべき場所が多く、今回は全体をくまなく見るのに、急ぎ足でなんとか2時間で済ませたが、もう少し時間をかけてまわることをお勧めする。

両施設のほかには、ミュンヘンにある「アルテ・ピナコテーク」(Alte Pinakothek) (レンブラント・ルーベンスなど多数所蔵) や「ノイエ・ピナコテーク」(Neue Pinakothek) (ゴッホの『ひまわり』やモネの『睡蓮』、ゴーギャンといった作品が所蔵) などを回ったが、いずれの博物館、美術館も飾ってある美術品には嚴重にロープなどが張られておらず、美術品の写真撮影が可能（フラッシュはNG）という点は、日本との大きな違いと感じた。

美術品を至近距離で見ることができるのは、美術品に触れてはならないというマナーをドイツ国民が十分に心得ているためであり、そして、それが実現できているということだからであろう。ところどころで、幼児や小学生も見かけたが、館内で騒ぎ出す子はおらず、幼いころから芸術を身近なものとして接することのできる環境を羨ましいと思った。

ただ、残念なことに携帯電話の急速な普及によるためか、携帯電話の使用マナーだけは徹底できていないようであった。ペルガモン博物館では、館内使用禁止となっているにもかかわらず、50歳の男性が、仕事の電話だからと使用して、警備の人から怒られている場面に遭遇した。何度も注意されているにもかかわらず、「すぐに終わるから」と言って、結局最後まで切らなかった態度には少し呆れてしまった。携帯使用に関するマナー

違反は世界共通だということを目の当たりにした。

最後に、食文化についても触れたい。ドイツの食事と言えば、ビールを抜きに食事について語ることはできないが、残念なことに私はあまりアルコールが強いいため、今回はカフェの紹介をする。1日1軒のペースでカフェに入ったが、ドイツのカフェは老若男女様々な年齢層の方が楽しまれており、男性でも直径10センチはあろうかというトルテ (torte、タルトのこと) をおいしそうに召し上がっていた。日本では女性客が圧倒的に多いので、その違いに驚いた。中でも特に印象に残ったカフェは、ミュンヘンにある「カフェ・ルイトボルト」(Cafe Luitpold) というお店で、1888年創業の老舗である。合成着色料を使用しない甘さ控えめの商品が売りで、ケーキとチョコレートをメインに取り扱っており、今回は、このカフェの名前を冠している「ルイトボルト・トルテ」(写真) をオーダーした。席は中庭にある池の真横に案内されたが、老舗だけあって、老齢の紳士、淑女が品よくお茶をしているので、注文が来るまで、一人で本を読みながらゆったりとくつろぐことができた。



(写真) 「ルイトボルト・トルテ」とコーヒー 合計約5€

日本では、サービス料が含まれたうえで価格設定が行われるが、ドイツでは、カフェでもチップを支払うマナーがあり、慣れていないために、チップの計算に毎回手間取った。ただ、チップは、「よいサービスでした、ありがとう」という心付けであって、チップの有無がその人の働きに対する評価につながる。仮にチップをもらえなかった

場合、「次、チップをもらうためにはどうやって顧客サービスをしよう」と考えさせる契機になるので、良い習慣であると思った。

今回初めてドイツを訪れたが、欧州の中でも、特に日本人が観光するのに向いている国であると思った。道中、同行者がパスポートと10万円相当のユーロが入った財布を落とすというハプニングがあったものの、まったく盗まれることなく届けられたということもあり、さらにドイツに対する印象が良くなった。ドイツ人の親切さ、丁寧さ、食事のおいしさ、電車のわかりやすさ、どれをとっても日本人にとって居心地がいい国である。どこかに旅行したいと考えて行き先が未定であるなら、是非一度ドイツに行くことをお勧めする。

フランス

パリの図書館事情

法学部 中尾 浩

フランスの国立図書館 (Bibliothèque nationale de France。以下、フランス風に BnF と略す) は現在、旧図書館と新図書館の二つが利用可能である。旧 BnF はパリ中心部のリシュリユー通り (2 区) にある。元来それほど広大な建物ではなく、手狭なことが問題視されていたが、長らく新 BnF 構想が実現せず、1988年に当時のフランソワ・ミッテラン大統領のパリ大改造計画の一環としてようやく新しい建物が企画実現された。完成は1994年だが、旧 BnF からの膨大な量の書籍や資料の大移動に時間がかかり、実際に一般公開されたのは1996年末のことである。新 BnF 完成後も、旧 BnF は稼働しており、主に古文書関係を担当している。1995年から97年まで私はパリに留学していた。その頃は主として旧 BnF を利用しており、帰国前に新 BnF が利用可能になったが、その時に足を運ばなかったのは痛恨の後悔だったので、今回はぜひとも訪れたい施設の一番手だった。

新 BnF は 4 つの建物からできており、それぞれが書物を直角に開いた L 字形をしていて、長方

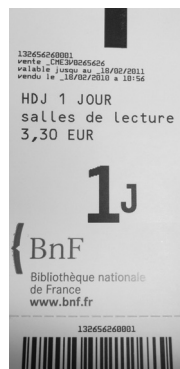
形の敷地の角に配置されている。あまりに整然と作られているので、うっかり自分がどの建物の中にいたのかを忘れると、どの建物に戻ればよいのか、わからなくなりそうなほどである。ただ、ルーブル美術館にせよ、ベルサイユ宮殿にせよ、どこが入り口なのかわかりにくいのはフランスではよくあることなので、別に BnF に限った話ではないとも言える。



フランス国立図書館

後ほど触れるパリの市立図書館は無料で利用できるが、国立図書館は有料である。料金は細かく設定されているが、一番安い一日券なら3.3ユーロなので、500円でおつりが来るくらいの料金である。これだけの施設を維持管理するためには、この程度の受益者負担はしかたあるまい。フランス人に限らず、外国人旅行者であっても、3.3ユーロ支払えば、通常の、とはいえ膨大な、書籍を閲覧することができる。

ただし、BnF が所蔵する書籍の中には国宝級の貴重なものも多数含まれているので、それらにつ



BnF の一日券

いては、然るべき手続きが必要である。専門の研究者の推薦状がなければ閲覧できないものもある。また、国立図書館の書籍は貸し出しはできない。そうした特殊な図書館ゆへの制約はあるが、街中の図書館で見つからない図書があれば、ここを利用すればよい。ただし、私自身もそうだったが、大抵の書物はパリ市内に58もある市立図書館でおむね間に合うのだ。

パリ市は東京や名古屋と同じく、特別行政区で、1～20区に区分けされ、それぞれの区に区役所がある。パリ全20区を合わせた大きさは、東京の山の手線の内側より少し大きいくらいだと言われている。東京23区はもちろん山の手線よりはるかに広いので、厳密な意味でのパリ市20区は意外と小さい。人口も200万人程度だから、名古屋市といい勝負である。ただし、面積は名古屋市の方がはるかに広い。

パリに住んでいるフランス人に言わせると、パリを20区のパリだけに限定して考えるのは間違いらしい。確かに、首都圏（いわゆるイル・ド・フランス）というか、パリ市内に通勤可能な程度あたりまで含めて考えると、1000万人くらいの規模にはなる。ただし、このイル・ド・フランスという地域圏が、およそ秋田県と同じくらい広いので、いささか範囲を広げすぎではないかという気がしないでもない。事実、パリの中心からそれほど離れているわけではない（約20キロ）ベルサイユ宮殿まで行くと、すっかり郊外の趣で、愛知大学の本部がある豊橋市の方がはるかに規模も大きく賑わっている。どこまでがパリか、などと考え始めるとなかなか難しいものがある。

花の都、芸術の都と称されるパリは同時に学問の都でもある。パリ大学は12世紀の前半に設立されたので、あと100年で開学1000年記念となる。その学問を支えるのが図書館で、山の手線の内側より少し広い程度の広さの中に、実に58のパリ市立図書館があり、さらに国立図書館が2つある。人口がほぼ同じ名古屋市には全部で20の区立図書館があるので、パリの67という数字がいかによろしくわかる。ちなみに東京にはもっと図書館

があるが、いわゆる区立図書館と名のつくものは各区に1つずつなので、23しかないことになる。東京の各区が管轄している図書館の中には、たとえばセンター図書室、といった数百冊程度の図書室も扱いとしては区立図書館にカウントされている。それならパリにも美術館や寺院の中に専門的な書籍を蒐集した図書室を備えているところがあるので、そのようなものまでカウントし始めると58ではとても収まらない。

パリは東京やニューヨークほど巨大な都市ではないので、少し歩けば、いろいろなところに行ける。私が昨年1年間、居を構えたところだと、普段よく使った図書館は実は同じマンションの一部にあった。もう一つよく利用した図書館も、バスやメトロでも行けたが、散歩がてら歩いても行けた。さらに、もう少しがんばれば、新BnFにも歩いて行ける、というくらい、パリの町中では生活、仕事、勉強が一体化している。名古屋市内に住んでいて、歩いて区立図書館に行ける人がどれくらいいるだろうか。

58の図書館のうち、10は特殊図書館である。特殊と言ってももちろん通常の書籍もあるのだが、たとえば映画関係の図書館とかフランスの歴史に強い図書館、推理小説を大量に蔵書している図書館といった具合に、個性を出している。もちろん、通常の図書館にも個性があって、子供用の本が充実している図書館とか外国語の本がたくさんある図書館などもある。ちなみに私がよく利用した一番近い図書館は、イタリー広場のすぐそばということもあって、小さいながら、イタリア語の本を多く所蔵していた。また、少し離れた方の図書館（実はここは特殊図書館の一つで、フェミニズムや女性問題に関する資料が充実している）は中華街に近いこともあって、中国語の本が多く所蔵されていた。

図書館の使い勝手はどうだろうか。これがまた実に利用者本位に作られている。まず第一に、図書館の利用に際しては、パリ市民である必要がない。パスポートだけで登録できる。しかも外国人（旅行者）だろうと、パリ市民だろうと、何の差

別もない。違いがあるのは、年間30ユーロくらいを支払えばDVDやビデオも貸してもらえという点だけである。書籍だけなら無料である。わざわざフランスに来て、DVDばかり見るのも味気ないので、節約もかねて、書籍だけ貸し出してもらうコースにした。



パリ市立図書館のカード。インターネットで現在借りている本を調べることもできる。

貸し出し冊数が多いのも、とてもありがたい。最初はいささか込み入っていて、本、雑誌、マンガ（日本風のマンガもあるが、いわゆるアメコミ風のフランス語で言うところのBD）などがそれぞれ5冊まで、一つの図書館で合計20冊まで、パリ市内全体で40冊を上限に貸してくれた。しかし、この方式は複雑すぎて運用が難しくなったのだろう。夏頃からとにかく一つの図書館で借りられるのが20冊までで全体で40冊までという風に、細分化がなくなったおかげで、ますます使いやすくなった。おかげで、我が家では図書館から借りてきた絵本が常時2～30冊置いてあって、子どもたちはフランス語は読めないが、美しい挿絵を堪能できた。

フランスおよびフランス語圏だけの絵本に限らず、世界的に有名なアメリカのエリック・カールさんの絵本（『はらぺこあおむし』、など）のフランス語訳があるのは驚くべきことではないかもしれないが、日本の絵本もかなり多くフランス語に訳されていて、子どもたちが「これ、日本でも読んだよね」と見つけてきては喜んでいて、ベルサ

イユ宮殿に奇妙なオタク芸術を飾り立てるくらいなら、こうした部分での日仏交流はもっと日本で紹介されてもよいのではないか。村上春樹のフランス語訳を読む前に、フランス人は子どもの時に、なかのわりえこさんの『ぐりとぐら』を読んでいたこと、フランスの子どもたちにもよく読まれていたことは、本の傷み具合で十分に伝わってきた。

このような発見があるのは市立図書館の魅力の一つでもある。国立図書館や大学図書館は調べものという明確な目的がある。ところが子どもに絵本を選ばせている間に、何気なく図書館を観察していると面白いことにいろいろと気づく。その国の子どもはどのような本を読んでいるか。大人はどのような本を読んでいるか。学生たちはどのように図書館を利用しているかといったことを、ほんの一部だとは思いますが、垣間見ることが出来たのは貴重な体験だった。学生諸君も海外に旅行や留学したときにはぜひとも公共図書館も利用して頂きたい。そして、そこがどのように利用されているか、どのような蔵書があるかといったことを見てみることも、とてもよい経験になるのではないかと思う。

オーストラリア

オーストラリアで今ブームの“Wagyu”

語学教育研究室 林 姿穂

オーギービーフで有名なオーストラリアで、現在“Wagyu”（和牛）という言葉が定着しつつある。美食家の間では人気ナンバーワンの食べ物だということだ。私がオーストラリアに留学したのは今から10年前のことであるが、その頃のレストランで食べられるステーキと言えば、赤身の良く焼いた硬い肉しか無かったように思う。勿論、スーパーマーケットに行っても、薄切りの霜降り牛肉などは見当たらず、唯一薄切り肉が買える場所と言えば、日本人が日本食材を買うメルボルン大丸の地下の食品売り場だけだったような気がする。

しかも、その値段は学生であった私にとっては驚くほど高く、一度も食べることなく帰国した。それから10年経った今、まさか“Wagyu”がブームになるとは本当に驚くべき事だ。当時興味を持ったことと言えば、英語で霜降り牛が“marbled meat”、薄切り肉は“thinly sliced meat”と呼ばれている事を知って、おもしろい表現だと感じたくらいである。オーストラリアで食べられる霜降り牛肉の味や品質には限界があると思い込んでおり、それほど興味はなかった。

そんなある日、当時住んでいたメルボルン郊外の私の家の近くに不思議なトラックが停まっているのを発見した。トラックには“Kaz's Scissors”と書かれていた。よく分からないが、なんだか“Kaz”というところが日本人の名前の響きに似ていたので、少し気になった。“Scissors”(=ハサミ?)というのもよく分からない。考え込んで道路に立ち止まっていると、そこに“Scissor Man”こと、日本人の武村さんという男性が現れた。私を見て「日本人ですか？」と声をかけてくださり、少し話してから私に「あ、京都出身だね？」と言われたのを鮮明に記憶している。実は、武村さんも私と同じ京都出身だということで、道端で長い時間立ち話をしてしまった。

さて、この武村さんの職業、“Scissor Man”とは何なのかをたずねてみると驚いたことに「包丁研ぎ」の仕事だった。日本独特の包丁を研ぐという技術を生かして、メルボルンにあるレストランを回り、レストランで使われている包丁の切れ味を良くするサービスをしているという事だった。日本では当たり前になっている包丁研ぎが、オーストラリアではビジネスになるという事実に驚き、また武村さんのチャレンジ精神にも感銘を受けた。私はその頃、あと3ヶ月足らずで帰国という時期にあり、大学院での最終課題に追われ、帰国後の就職についてもあれこれ悩んでいたが、武村さんに出会うことで「仕事は自分で見つけるもの」「学校の勉強ばかりでなく、もっと頭を柔軟に使うこと」「何がビジネスチャンスなのか先見の明を持つこと」を教えられた気がした。

さて、この武村さんと“Wagyu”がどう関係しているのかについてお話したいと思う。実は“Scissor Man”をしながら、武村さんはその頃から別のお仕事にも挑戦されていた。それはオーストラリアに和牛を普及させる事だった。和牛と言っても日本国産ではない。日本にもとからいる牛に外来種を交配し、品種改良を重ねた肉牛のことだ。そのため日本国産の牛肉と区別するために、ここではオーストラリアでの表記と同様“Wagyu”と書くことにする。その“Wagyu”の普及を目標に30年以上も前にオーストラリアに渡られたのだ。当時は航空運賃が高かったこともあり何日もかけて船で渡られたということにも驚いた。仕事を成功させるための意気込みと情熱、そして行動力に感動し、自分も見習っていきたくと思った。

10年前、当時まだ今ほど品種改良されていない、実験段階にある“Wagyu”を武村さんからいただいたのを覚えている。確かに見かけはマーブル模様なのだが、赤身の部分にオーギービーフ独特の硬さがあり、日本の霜降りとは全く違った食感であった。しかし、武村さんの包丁で薄く切ってもらった“thinly sliced meat”はとても懐かしい日本の味がしたのを覚えている。最初で最後の“Wagyu”の試食であったが、これが本当に赤身の硬い肉を好むオーストラリア人に受け入れられるのかは正直疑問だった。しかし、10年経った今、品種改良が重ねられメルボルンのレストランで高級食材として料理されるようになったと言うことだ。日本食レストランだけでなくイタリア料理やフランス料理のお店でも“Wagyu”のメニューが開発されているそうだ。

さて、先日1回生の論説英文講読の授業で“Kobe Beef”の英文記事を取り上げた。過去25年間でアメリカ産の牛肉の消費が落ち込み、代わって“Kobe Beef”のように高品質で高価な肉の消費が増えたという興味深い内容であった。牛を日本から輸入することの難しさや交配の過程についても書かれていた。私は記事を通して、アメリカでは25年前から日本の牛肉が普及し始めたことを知ったのだが、この数字を見て、改めて武村さ

んの先見の明に感銘を受けた。何故なら30年以上も前から海外での和牛の普及を考えて日本を離れ、その仕事に情熱を注がれたからだ。

この英文記事を通して、ふと自分の留学生活と武村さんとの出会いを思い出したわけであるが、海外には思いがけないビジネスチャンスがあると思う。先見の明を持つこと、創造力を働かせ熱意を持って仕事をする事の大切さを少しでも大学生の皆さんにも知ってもらえたらと思う。今回、武村さんの許可を得て語研ニュースに記事を書かせていただいたが、武村さんの“Wagyū”普及への強い思いは以下のサイトから見る事が出来るので是非ご覧いただきたい。

<URL>

GO豪メルボルン

<http://www.gogomelbourne.com.au/interview/gourmet/1546.html>

韓国

アジアをつなぐ英語のチカラ——韓国の英語教育熱

現代中国学部 川村 亜樹

10月22日と23日に筆者は韓国の京畿道外国語研修院で開催された第2回国際外国語教育学会に参加し、英語教育に関する講演をおこなう機会に恵まれた。今回はそこで感じた韓国の英語教育熱を紹介するとともに、アジアのビジネス・シーンにおける英語の重要性について述べたい。

1. 国際外国語教育学会

今大会のテーマは「目標言語を使用して外国語を教える」であった。つまり、英語ならば、英語だけで英語を教えるということである。英語、日本語、中国語それぞれの会場があり、英語の会場では22日に筆者以外に、北京の実験高校の英語教員、オーストラリアのグリフィス大学、イングリッシュ・ランゲージ・インスティテュートのディレクター、アメリカ大使館英語普及事務局広報部長が講演をおこなった。

4名が共通して強調していたことは、学生が積

極的に英語のトレーニングをおこなう「学生主体の」空間をいかに構築するかであった。筆者は、10月にインターネット出版された拙著『英字新聞は英語プレゼンテーション力向上の源泉』（アーキテクト社）でも紹介している、英語のプレゼンをととした3ステップ方式の総合英語トレーニングについて講演をおこなった。他の講演のなかで特に興味深かったのは、世界中から留学生を受け入れている特性を活かした、グリフィス大学の授業であった。各留学生がそれぞれ母国と留学先の文化的な違いを発表し、それをどのように乗り越えたらよいかを笑いを含めた面白いエピソードに仕立て、ロールプレイ形式で演じるというトレーニングであった。母国と留学先の生活習慣の衝突をどのように克服するかは、留学生生活を生き残るための現実問題であり、単に留学先の生活習慣を学ぶコミュニケーション・トレーニングとは一線を画す内容である。そして、この取り組みは、英語が、主要な英語圏の国々だけのものではないことを再認識させる。

また、京畿道外国語研修院は、主として学校教員向けの語学研修施設であり、講演以外に、現地の中学、高校の英語教員による英語ディベート大会もおこなわれ、大勢の観衆の前で教員たちが熱のこもった討論を披露していた。今大会の案内パンフレットにも記載されている、「偉大な教師は当然ながら学生に多くを期待するが、自分自身にはそれ以上を求める」を如実に示していた。さらに、筆者は日本語教員のディベート大会決勝で審査員を務めたことで、日本語教員の方々と話す機会があったが、そのなかの一人は、御子息に車での移動中、英語のテープを聴かせて、毎週フィリピン人の電話英会話のレッスンを受けさせているそうである。これは特別なことではなく、韓国ではここ数年フィリピンへの語学留学が盛んらしい。漠然とした憧れではなく、大学卒業および企業入社の条件として高いレベルの英語力が求められ、英語を用いてグローバルなビジネスに参加するという現実の目標を設定しているからこそ、こうした取り組みが可能なのだろう。

2. アジアのビジネス・シーンにおける英語の重要性

韓国企業が英語を重視する一例を挙げてみよう。日本サムスンホームページにおいて、採用情報として、「日本サムスンでは、韓国本社をはじめ多くの海外のお客様との取引があります。輸出入等に関わる書類は全て英語ですので、英語力はある程度必要です」(下線は筆者による)と説明し、「サムスンの使命は国(韓国)への貢献から世界への貢献と大きく広がりました」との人事メッセージを掲げている。また、TOEICを実施・運営する国際ビジネスコミュニケーションによる在アジア日系企業における英語ニーズ調査(2009年10月19日付プレスリリース「企業・学校における英語活用調査」)によると、社員の英語力を現在よりも向上させたいと考える企業は、

韓国 73.8%	台湾 63%
上海 40.9%	香港 55.8%
タイ 72.3%	

となっている。やはり韓国では英語を決して無視できないのである。英語が国民の公用語、公的共通語であるシンガポール、フィリピン、インドに加えて、韓国、中国、台湾、タイでも英語がビジネス・シーンで共通語になりつつあることもわかる。

したがって、ユニクロや楽天が英語を社内公用語にしたと騒ぐこと自体、アジア全体のビジネス・シーンでの英語の重要性の認識に関して周回遅れの反応であることに気づかねばならない。柳井正(ユニクロの会長兼社長)は7月31日付朝日新聞で、2012年入社の新卒社員の3分の2を外国人から採用すると説明したうえで、「英語使用を広めないと、外国人がいづらいい会社になってしまう」ので、「いつどんな場面でも英語でコミュニケーションできる人材集団にならなければならない」(下線は筆者による)と述べた。こうしたトレンドを反映して、英会話スクール Gaba は9月21日付プレスリリースで1000名を対象とした「自己投資に関する調査」をおこなった。「会社の公用語が英語になった場合、どのように対応するか」という質問に対して、「勉強をする」74.2%、「勉強

をしない」25.8%であったそうだが。実は、これら二つの例は日本社会における英語習得に対する問題点を示唆している。つまり、「~しなければならない」や「会社の公用語が英語になったら」という表現や質問は英語学習に強制的な重苦しいイメージを与えてしまい、「英語を使ってグローバルに働きたい」という前向きな発想を阻害する可能性をもたらすのである。日本社会が英語教育において取り組むべき第一の課題は、この発想の転換である。

就職活動シーズン本番に突入しているが、日本市場はいまだ厳しいままである。しかし、英語を使えば狭い市場で苦しむ必要もなくなるかもしれない。そして、英語をとおしたアジアの、さらには世界の人々との交流は面白いかもしれない。今年度秋学期の現代中国学部「実用オフィス英語」と経営学部「ビジネス英語」のテキスト *Get Ready for Business Student Book 1* (マクミラン・ランゲージハウス 2008) では、日本、韓国、中国を含むアジア各国の人々がビジネス・シーンで話す英語を聴くことができる。英語のテキストもアジアを重視して作成されるようになってきている。受講生たちは、ネイティブに混じって日本人が話す英語が聴こえるとほっと一息つき、他のアジア人の訛りに対して驚いたり面白がったり、その訛りを真似する者もいた。良い例とは言えないかもしれないが、少なくとも強制されることなく、自発的に楽しくビジネス・シーンでの英語表現を獲得したのである。このように、言葉が聞こえるだけでも楽しいのだから、その言葉をとおして他のアジアの人々と交流できれば、もっと面白いはずである。

実際、筆者も今回韓国で、韓国人、中国人、オーストラリア人、アメリカ人らと中国料理店(やはりどの料理も唐辛子がふんだんに使われ、日本の中国料理とは異なり、顔から汗がひくことはなかった)にいて JINRO の焼酎で乾杯して、無駄話で笑いつつ英語教育についても語り合っただけで交流を深め、また講演後には南アフリカの教員とも話せて、英語をとおしたさまざまな可能性の広がりを

実感した。学生のみなさんにも、将来社会人として、英語でつながるグローバル社会が産み出す可能性をぜひ大いにつかんでもらいたい。

編集後記

今年の夏は、ラニーニャ現象の影響で記録的な暑さだった。気象庁は30年に一度の「異常気象」と認定、クーラーを嫌うお年寄りが家の中で熱中症にかかるという事件も相次いだ。また、9月10月も残暑が厳しく、秋を楽しむ間もなく冬に突入したかのようだ。今冬は雪が多くなるとの見方もある。インフルエンザも流行の兆しだ。気をつけよう。

語研の秋冬と言えば、まず外国語コンテスト開催である。この号が出る頃には、すでに結果が出ているはずだ。その詳細は次号で報告するとして、今回お知らせしたいのは、もうすぐ近づく外国語検定奨励金の申し込み締め切りである。さらに詳しい情報は語研ホームページで確認するか、直接語研に問い合わせしてほしい。今年惜しくもチャンスを逃した諸君は、ぜひ来年リベンジ戦を！

明けて2011年は、黒笹最後の年。豊かな自然の中で四季の美しさをみんなで楽しもう。

(u)



革命記念日（7月14日）の夜に仕掛け花火に浮かび上がるエッフェル塔。フランス全土でさまざまな催しが開かれるが、エッフェル塔に仕掛けられる大花火はひととき華やかである。

「外国語検定奨励金制度」 を知っていますか

名古屋語学教育研究室では、所定の外国語検定試験で一定以上の成績を修めた学生に対して奨励金（図書券）を贈って表彰しています。今年度の申し込み締め切りが近付いています。合格した方は、期間内に忘れずに申し出てください。

対象者：

法学部生 ・ 経営学部生 ・ 現代中国学部生

奨励基準：

英語：

英語検定 準1級以上

国連英語 B級以上

通訳検定 3級以上

TOEFL (Internet-based T) 48点以上

商業英検 B級以上

ガイド試験 合格

TOEIC (05以前の学生対象) 530点以上

* TOEIC IP・カレッジTOEIC・TOEFL ITPは対象外です

ドイツ語：ドイツ語検定 4級以上

フランス語：フランス語検定 4級以上

中国語（法・経営学部生対象）：

中国語検定 4級以上

新 HSK 4級以上

韓国・朝鮮語：ハングル検定 4級以上

日本語（留学生対象）：

* 必修外国語として日本語を履修中、または修得済みの学生。

JLPT 日本語能力試験 N1または1級

BJT ビジネス日本語能力試験 480点以上

2010年2月以降取得したものに限りです。

本年度入学生は入学後受験したものに限りです。

申し込み：

2011年1月31日（土）までに名古屋語学教育研究室または車道教学課まで学生証と合格通知書（成績証明書）を持参してください。詳しくは、名古屋語学教育研究室まで。

愛知大学名古屋語学教育研究室

URL: <http://leo.aichi-u.ac.jp/~goken/>